日本建築学会九州支部研究報告
第45号　2006年３月

集落形成の歴史と海辺の暮らしに関する聞き取り調査

―密集した漁村集落の生活環境に関する研究 その５―

準会員○ 黒田　侑香*1　同　野口　裕子*1 正会員　加藤　浩司*2
準会員　山本　美沙*3 正会員　辻原万規彦*4

７．都市計画－３．地区とコミュニティ
牛深市，漁村，形成史，暮らし，聞き取り調査

１．本報告の主旨

１）背景について

本報告を一つとする一連の研究の目的は、先人の数多くの知恵に裏付けられた漁村集落の調査研究を通じて、自然エネルギーを有効に取り入れた居住空間づくりについての知見を得ることにある。

対象事例は、狭小な民家が密集しながらも風通しが良いと言われる※1熊本県牛深市の漁村集落「真浦・加世浦地区」である。そこには、「背戸」を語源※2とする「せどわ」という路地空間が残っており、自然エネルギーを制御し有効に利用しようとする工夫がみられる。そうした同地区を対象に、本研究では「計画」と「環境工学」という２つの分野からアプローチを行っている。前者には既報として「その１(1)」があり、その継続研究として本報告がある（後述）。一方、後者では、「その２」～「その４」の３編がある。「その２(2)」では、自然エネルギーの有効利用を探るため、基礎的な実態把握として行った夏季の微気象観測の成果報告である。これは既報である。それに続いて、今回は「その３」と「その４」を報告する。「その３(3)」は、「夏季の風環境を、住民がどのように感じているのか」を調査・分析したアンケートの成果報告である（主観調査）。「その４(4)」は、「その２」を基礎とする、より詳細な夏季の微気象観測と路地空間を対象に行った風向調査の成果報告である（物理的な調査）。

２）本報告について

前述のとおり、本報告は「その１」に継続するものである。「その１」では、本研究で注目する路地「せどわ」を取り上げ、その形成過程について聞き取り調査を行った。結果、この集落内の路地にはそれぞれ通称がついており、住民の暮らしにも根付いたものであることがわかった。一方、研究課題として、集落形成の歴史についての調査研究の必要性があることも認識した。それを受け、計画分野からのアプローチとして、「集落の成り立ちと変容過程」をテーマに立てることにした。今回は、そのもとで今夏に行った聞き取り調査の成果報告を行う。

３）既存の研究・文献等について

真浦・加世浦地区の歴史に関する研究・文献等には、民家調査を中心にまとめた熊本大学建築史研究室による報告書(5)(6)がある。対象を広めれば、天草地域の建設史をまとめた文献(7)，牛深漁業史の編成を綴った文献(8)や資料(9)，牛深の漁港や集落での暮らしの今昔を記録・整理した写真集(10)など、本研究にとって貴重な研究等の蓄積がある。これらについての詳細な調査は今後の課題であるが、真浦・加世浦地区の集落形成の歴史に対する言及は少ない。とりわけ、文献（５）（６）でも、集落の歴史について触れられてはいるものの、それについての考察は課題とされている。

写真１　真浦東より臨む対象地

写真２　加世浦海側の路地

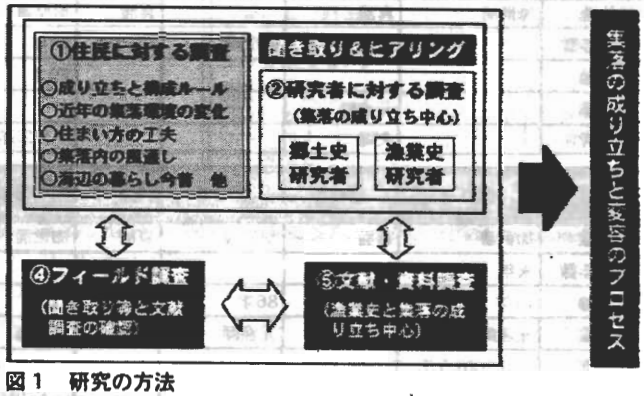


図１　研究の方法

A Hearing Survey to Local Inhabitants about the History of a Village and People's Life
― Study on the Living Environment in a Thickly Settled Fishing Village Part 5 ―

KURODA Yuka, NOGUCHI Yuko, KATO Koji, YAMAMOTO Misa, TSUJIHARA Makihiko and OKAMOTO Takami

2．聞き取り調査について

研究の方法は図１のとおりである。本稿では、このうち図中①に関する調査の報告を行う。

聞き取り調査は、2005年８月２日（火）～５日（金）にかけて、学生中心のチームを編成し実施した（有明工業高等専門学校建築学科５年生，熊本県立大学環境共生学部４年生，熊本県立牛深高等学校３年生）※3。

調査方法は、次のとおりである。図１中①に挙げる項目を主要項目とし対話形式で調査を行った。記録は、ノート上へのメモと地図への書き込みによる。後者は、特に場所にまつわる情報を書き入れるために用いた。調査終了後は、Ａ１に拡大した地図に各チームが聞き取り内容の書き込みを行い、成果の共有化を図った。一方、語り手を依頼する住民は次の３つを判断材料として選定した：❶事前に調査依頼を行い協力意思の確認ができた住民，❷事前調査で居住年数の長いことが確認できた住民，❸住民からの紹介※4。その過程を経て、聞き取り調査を行った住民の一覧を表１に整理する。ここに挙げる住民に加えて、老人クラブへの聞き取り調査も行った。

3．成果について

聞き取り調査の成果は、図２に例を挙げる「まとめシート」を個人ごとに作成し整理を行った。上部の地図に場所が特定できる情報の書き込みを行い、下部の表にはそれ以外の情報をキーワードごとに整理した。なお、キーワードは、全ての調査の成果を見て共通することの多いものを抽出している※5。

全シートを照合させた上での詳細な分析は今後の課題であるが、多くの聞き取り内容に共通することとして、次の３点を読みとった。

1）集落形成に関して

明らかに認識できたことは、真浦地区（真浦地区以東の船津地区）から加世浦地区にかけての海岸線が幾度かの埋立を経て変わってきていることである。特に、現在の真浦公民館と真浦公園のあるところ（**図２参照**）は、戦後に埋立を繰り返しながら、段階的に形成されてきたことがわかった。聞き取った内容を総合すれば、ここは昭和20年代に１回、昭和30年代に２～４回の埋立を経験してきてたと思われる。また、それ以前の海岸線についてわかっていることは、この地区のメインストリート（現在市道）とされる「本通り（既報「その１」詳述）」が、元来の海岸線だったのではないかということである。「山と海に挟まれて１～２列の民家が並ぶのが、牛深の漁村集落の特徴」を聞き取ったこと、周辺に暮らす住民の「姓」に着目した場合に見いだせる特徴などがその判断材料だが※5、これは推測の範囲を出ない。この点については今後の確認が必須と考えている。

2）海辺の暮らしに関して

かつての海辺は住民の暮らしと密接に関わっていたが、ここでわかったことである。漁村集落ゆえに当然のことかもしれないが、それ以外にも海辺では、洗米や洗濯が行われていたり、子供たちにとっては遊び場となっていた。しかし、近年では埋立の影響か、そうした日常的な関わりが減ってきており、住民の暮らしとの隔たりが生まれてきていることを確認した。一方、

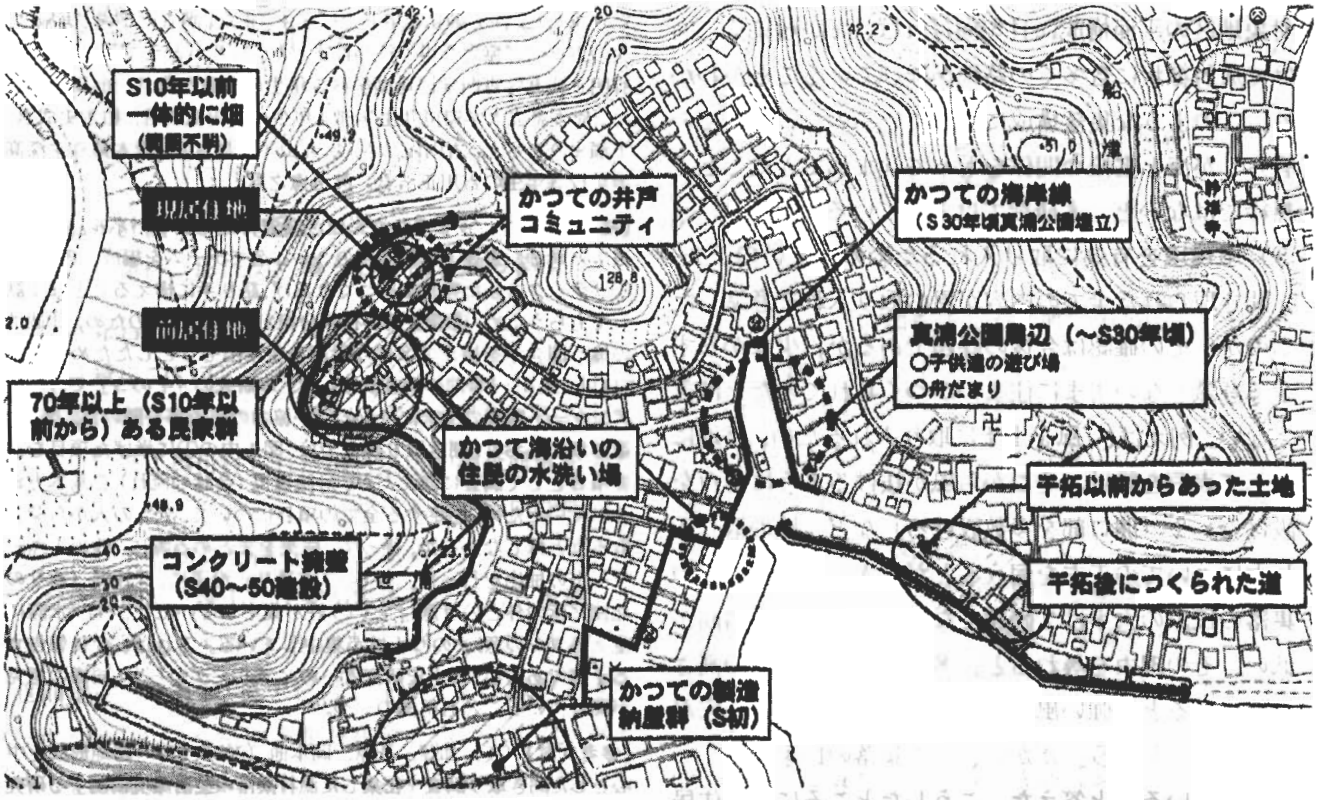
表１　語り手一覧

氏名	①[illegible]	②[illegible]	③Y	④U	⑤T	⑥S	⑦H
居住地	加世浦	真浦		真浦	加世浦	真浦	真浦
居住年数		生後ずっと	約60年	約60年	79年		70-80年
年齢					79才	74才	⑦82才
職業		元漁師				元漁師	
備考		夫婦			・S25自宅		
居住地	加世浦	真浦	加世浦	真浦	加世浦	真浦	加世浦
居住年数	永年	約44年		約34年		約50年	70年（以上）
年齢	77才	68才	86才	63才	71才	69才	
職業	元漁師		元漁師	漁師	元漁師	漁業以外	
備考	・S30頃自宅 ・～S25漁師	・S40結婚 ・船津生	・S21自宅 ・S36改築		・区長（加） ・S40自宅	・区長（真）	

＊１：氏名表記は、姓・名の順。イニシャルが同一の場合は、姓の一文字目の母音を併せて表記。
＊２：YA-K氏は、今の住まいに引越しをする以前、近傍に居住していたため「以上」を付記。

写真３　聞き取り調査

写真４　聞き取り内容の共有化



○コミュニティ&暮らし（不明）：Mさん宅真の井戸水を使用。Wさん、Kさん、Eさんも使用。井戸が小さく赤い水が出る。きれいな水をとるために早朝に井戸に行ったが、その時には音が鳴り近隣の人に迷惑にならないよう気を遣った。

○コミュニティ（不明／今昔）：昔の家（S50建替）には縁があったから、疲れたらそこに座って休憩していた。しかし今の家にはサッシがあり、縁もなくなってしまったため、ゴミを捨てに行っても誰にも会わなくなった。それに高齢者世帯が増えて子供が減った。

○暮らし（S10年頃）：ここに家を建てた頃（70年前）、薪でご飯を炊いていた。焚き木は長島辺りから船で売りに来ていた。

○暮らし（不明／仕事）：仕事があるのでAM5時頃に洗濯して仕事に行っていた。

○暮らし（船津との関わり）：舟津Iさん宅辺りは、海岸べたで通られなかったからあまり行かなかった。そこに橋のような道路ができて、それ以後船津がどうなっているかがわかった。

○その他：舟津の「むつみ橋公園」辺りは海で、船が沢山あり、子供が遊んでいた。

○海との関わり（不明／家事）：山の方に住む人達は海まで行かず、米研ぎや洗濯は井戸水でやっていた。海沿いに住む下の方の人達は洗い物は海でしていた。その光景を、電気屋の前辺りから、薪を買いに行く時見ていた。

○海との関わり（S初／子供の遊び）：子供の頃、舟津の「はじめ橋」辺りから真浦の海岸まで、子供達がたらいに乗って泳いでいた。

○海との関わり（S20-40頃）：海岸まで息子をおぶって散歩していた。道幅がかなり狭かった。

○海との関わり&近年の変化（S10-20年代／子供の遊び）：真浦公園は海だったので船が沢山とまっていて、そこで子供達が海に飛び込んで遊んでいた。

○集落形成（S10年頃）：70年前に家を建てた。それより以前、周りは山ばかりで周囲に家はなかった。

○集落形成（S10年以前）：家を建てる以前、ここは畑だった。海へは畑を下って抜けていた。今ある階段は家を建ててから自分達でつくった。

○集落形成（S10年頃）：Hさん、Wさん、Kさん、Eさん宅は70年前から。私の家の近くの階段下の家も70年以上前からある。

○集落形成（戦前）：戦前、長手の方はずっと山で、製造納屋や水産加工場があり民家がなかった。

○家並み（不明）：瓦葺屋根の家ばかりだった。私の昔の家は平屋で2階はなかった。瓦屋根は戦前になってから。瓦は船でどこからか運んできていた。

○家並み（戦中）：この辺りは戦争の被害はあまりない。しかし更新が多く、古くからある家はない。

○近年の変化（S40～50）：それまでに土砂崩壊が多かったので、S40～50年頃、真浦から加世浦まで、コンクリートで家の後や周りの擁壁をつくった。

○自宅：今の場所に引っ越して来る以前は、YKさん宅に住んでいた。そこはかなり昔からあった。

○自宅：シロアリにやられ、家を3回建て直した。今の家はS50年に建て直した。

○風環境：家の高さが低いのは風が強いから。台風時は、家の屋根の瓦がグルグル回り風が舞う。南風がすごく強く、子供に習字を教えていたので、屋根を習字の長台など、いろんなもので押さえていた。

○風環境：H2～3年の台風19号襲来時の被害が大きかったので、雨戸やサッシをつけてもらった。シャッターは去年つけた。昔は飛ばないようにベニヤで打ち付けていたが、今は屋根に上れない。

○風環境：風が入るよう窓を沢山つけて夏向きの家に。しかし、冬は寒いので大変。

○住まい：家の建て方には隣同士でルールがある。それがもとで隣同士で喧嘩するという話を結構聞く。

図3　調査のまとめシート（⑮YK氏の場合）

対象地区の平面構成に目を向ければ、海から集落に向けて放射線状に数多くの路地が延びていることがわかる。このような集落構成になっているのは、ここでの暮らしが海と密接な関係をもって営まれてきたことと無縁ではないと、本研究では考えている。

3）風環境を有効に取り入れるための住まいの工夫

聞き取られた全ての内容が風の取り入れを意識したものか、その確認は今後の課題であるが、少なからず全く意識しないままに住まいがつくられてきたとは言えない。例えば、「風を上手に取り入れるため、路地に面して表戸を設け、そこから風が抜けるように背戸を設ける」や「開口部を多数設ける」など、風の取り入れ方についての工夫を伺うことができた。また、この集落の民家の大半は２階建てなのだが、２階の階高が低い。その理由を尋ねると、多くの住民が「家の高さが高くなると、強い風をまともに受けてしまい、家が吹っ飛んでしまう。だから、この集落の民家は低くつくられている」と答えた。こうしたところにも、住民たちの風への意識の高さを伺うことができると思う。

4．まとめ

今回は、真浦・加世浦地区の集落形史を探るべく行った、聞き取り調査の方法と成果を整理した。その結果、❶この地区が埋立を繰り返しながら段階的に拡張・形成されてきたこと，❷かつては海辺と人々の暮らしは密接な関係にあったが、近年ではその関係が途絶えてきていること，❸その度合いの確認は今後の課題であるが、風環境と上手につきあう意識を持って住まいづくりが行われていることを確認した。まだ未解明なことは多いが、今回の整理を通じて、これからの調査研究の手がかりはつかめたのではないかと考えている。今後の研究方針としては、ここでの成果をふまえて、まず聞き取り調査内容についての詳細な分析を改めて行いたい。併せて、図１中にも示したフィールド調査や研究者へのヒアリング調査成果との関係づけも行っていきたいと考えている。

【謝 辞】本研究の一部は、平成15～17年度熊本県立大学地域貢献研究事業（設置者からの依頼研究）による成果である。調査にあたっては、ご加世浦地区区長：鯖江要さまと真浦地区区長：平尾一喜さまをはじめとする、両地区の住民の皆さまに多大な協力をいただきました。深く御礼を申し上げます。また、調査の準備・実施は、次の方々のご協力を得て行われました。ありがとうございました。有明工業高等専門学校建築学科５年生の中島宏典君，前田千香さん。熊本県立大学環境共生学部４年生の岩田紘明君，柏木史成君，下瀬まりこさん，古内佐知さん，丸山千佐昌さん。熊本県立牛深高等学校３年生の吉川正浩君，渡邊憲之君。

【補 注】※１：うしぶか海彩館漁業資料館の展示パネル。※２：※１と同じ。※３：学校混合の３～４名でチームを編成。理由は、①リラックスした雰囲気をつくりあげ、語り手に構えることなく話してもらうため，②調査時の役割分担ができるなどのため，③個性の違う聞き手を揃えて多様な対話を生み出そうとしたため［文献(11)］。※４：「事前の調査依頼」は、本研究の「その３」で行ったアンケート調査の文末に付して行い協力の可否等を聞いた。※５：第２章のとおり、聞き取り調査では、図１中の①に挙げた項目を主要項目として調査に臨んだが、対話重視（会話の流れ）を基本方針としていたため、想定する全ての項目について、全ての人から聞き取ろうとはしなかった。従って、成果をまとめる際に、改めてキーワードの抽出を行った。※５：「本通り」沿道に、「外浜（通りの北側／浜の外という意）」という姓が集中していたり、「吉（水際に生えるヨシの意）」のつく姓が集中している。これは、今後報告する予定であるが、郷土史研究者へのヒアリングからも、同様の意見が聞けていることも根拠の一つ。

【参考文献】（１）加藤，辻原，岡本他（2005.03）「路地形成を中心とした聞き取り調査－密集した漁村集落の生活環境に関する研究その１－」日本建築学会九州支部研究報告第44号〔計画〕PP.541-544。（２）黒木，辻原，加藤他（2005.03）「集落内部における夏期の微気象観測－密集した漁村集落の生活環境に関する研究その２－」日本建築学会九州支部研究報告第44号〔環境〕PP.273-276。（３）加藤，山本，辻原他（2006.03）「夏季の風環境に関するアンケート調査」日本建築学会九州支部研究報告第45号〔環境〕（投稿中）。（４）山本，辻原，加藤他（2006.03）「集落内の路地と空き地が微気象に及ぼす影響－密集した漁村集落の生活環境に関する研究その４－」日本建築学会九州支部研究報告第45号〔環境〕（投稿中）。（５）熊本大学堀内研究室（1971）「牛深市加世浦漁業集落調査予備調査報告書」（６）熊本大学堀内研究室（1971）「牛深市加世浦・真浦漁業集落調査第二次報告書」。（７）天草地区建設業協会『天草建設文化史』（８）梅田（1998.６）『牛深漁業の今昔』下田印刷，（９）牛深市教育委員会「牛深の漁業史」（10）吉川（2001.７）『写真集牛深今昔』熊本日日新聞情報センター。（11）早稲田大学後藤研究室 田口，佐久間，後藤（2005.３）『まちづくりオーラルヒストリー』水曜社，（12）毛利悦子（2003.３）『都市域における海辺と暮らしの関わり方に関する研究～三番瀬を事例として～（千葉大学大学院修士論文）』

＊１　有明工業高等専門学校建築学科　本科生　College Student, Ariake National College of Technology
＊２　有明工業高等専門学校建築学科　助教授・博士（工学）　Assoc. Prof., Ariake National College of Technology, Dr. Eng.
＊３　熊本県立大学環境共生学部　助教授・博士（工学）　Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.
＊４　熊本県立大学環境共生学部　学部生　Student, Prefectural University of Kumamoto